論　文　要　約

論文題目　「異文化間に育つ子ども」の教育戦略研究
　　―高学歴中国人母親と文化融和を中心に―

申 請 者　陳　暁梅

論文要約

問題の所在

グローバル化が進む現代にあって、異文化間における子ども教育は、日本だけではなく世代の未来を繋ぐ重要かつ喫緊な課題である。1990年代以降、日本では人口減少・少子高齢化の傾向が次第に顕著となり、これにともなって在留外国人が増加し始めた。こうした社会情況が要因となり、日本では「留学生や外国人材の受け入れ・共生」という点に社会や研究者の注目が集まり、外国人の定住の重要性が意識されるようになってきた。こうしたことから、社会学・歴史学・人類学・教育学など様々な分野での研究が蓄積されてきている。しかし、諸領域の研究蓄積とその深化にもかかわらず、外国人女性と異文化間に育つ子どもに関する研究、なかでも留学した高学歴母親とその子どもの教育戦略は、これまで充分な注目を注がれることはなかった。彼女たちは国境を跨ぎ、異文化圏に生きることの困難に対しさまざまな「戦略」を案出して努力を傾注し、とりわけ、次世代の教育において何らかの「教育戦略」を選び取っているきわめて興味深い存在であるにもかかわらず、である。

本研究が対象とするのは、留学した母親の次世代に対する教育であり、日本の大学院まで留学した中国人母親の教育戦略とその異文化間に育つ子どもの教育達成のあり方を解明にすることを目的としている。具体的には、人類学や社会学で蓄積されてきた異文化間研究を援用し、高学歴であり国際的な人材でもある彼女達が異文化環境下の子弟に対しどのような教育戦略目標を立てているのか、その教育戦略の基となる育児の現場ではどのような問題が起きているのかと言った現況を解明する。

また、本研究は、子ども教育の主な担い手である母親が、異文化環境が子ども教育に与えるあらゆる影響を把握し、母親の目線を通して「異文化間と教育」の困難を乗り越えようとしていることを指摘し、文化融和を図る母親と子どもの主体的な生き様を描き出すことを目指す。異文化が生み出す様々な子ども教育の課題を外国人母親と子どもたちがどのように受け止め、困難を乗り越え、目標を達成していくのか（あるいは障害に阻まれているか）を、本研究は「彼女たちの生活の場」での現状にもとづき解明を通し、それらの事情の理由と繋がりを探り、高い適応性を持つ高度人材の養成に貢献するのでは、と考える。

研究方法

異文化家庭という境涯・環境に生きる子どもたちは、簡単に統計資料のようなデータ数

値化出来るものではなく、それぞれアイデンティティを持つ存在である。そこで本研究は質的研究を中心に、大量なフィールドワークを行い、実態解明を狙った。

本研究は 2019 年 4 月から 2020 年 9 月にかけて半構造化面接でインタビューを行った。事前に質問項目を定め、現場では一対一で項目ごとに質問し答えを記録した。インタビューは基本的には録音し、逐語文字におこし、録音の許可が得られない場合は、インタビュー中にメモを作成し、終了後文章にまとめた。そして、インタビュー調査の補佐としてアンケート調査を行い、①夫婦それぞれの来日の経緯や帰国した理由、②家族構成、③経済力、④他の個人情報等を把握した。

調査対象は、日本の大学院に在学或いは卒業した女性中国人留学生でありながら、15 歳以下の子どもを扶養している者に定めた。調査時点での所在により調査対象は概ね 2 タイプに分けられる。A タイプは日本で出産し現在も日本に滞在する母親で、合計 36 名であった。B タイプはすでに中国に帰国した母親で、合計 13 名であった。リクルート方法については、まずは筆者の知人から始め、それから調査対象の紹介により範囲を広げる「雪だるま方式」を用いた。

調査地の選択について、日本では中国人が集中する東京都・大阪府・名古屋市・神戸市・福岡市と、中国では北部地方の瀋陽市・北京市、中部地方の大連市・重慶市・西安市・武漢市・上海市、南部地方の広州市・深圳市・珠海市などの都市を選んだ。

調査場所は喫茶店やレストラン・調査対象や筆者の自宅であった。対面できない場合には、日本のラインにあたるウィーチャットを用いた。インタビュー調査の時間は一人あたり 30 分〜3 時間であった。調査のすべては中国語で行った。

各章の概要

本論文の構成は以下の通りである。

序章ではまず、研究の由来としての背景を概観した。そして、日本に大学院まで留学した中国人母親の次世代に対する教育戦略に着目して課題設定をした。また研究の目的・方法と各章の構成を述べた。最後に本論文で使用する用語を定義した。

第 1 章では、これまで行われてきた異文化間に育つ子どもに関する先行研究をまとめ、その分類を明らかにした。また、高学歴中国人母親の次世代に対する教育戦略研究の必要性を考えるために母親と教育戦略の先行研究についても概観した。あわせて、外国人子ども政策についても整理した。

第 2 章では、在日高学歴中国人母親が異文化環境（訪日）に至る経緯、子ども養育の現状、彼女たちが考えた教育戦略などの具体をまとめ、そこから異文化間での子ども教育の国際化の傾向や文化融和との連携を検討した。本章の調査で判明したのは、彼女ら高学歴中国人留学生母親は子ども教育戦略を立てる過程で、社会で生きて行く生存能力の養成を最重要と考える一方、事業の成功などよりも精神面の豊かさへも注目していることである。また、彼女たちは、子どもたちに母国の文化の継承を望むと同時に、日本社会に順応する努力など、子どもたちを国際的人材に養成する道を歩んでいることも明らかになった。特に、彼女らは子どもの言語力、日本文化への適応、外国人の子どもとしての不利

（いたずら・いじめ）の回避を教育戦略の重要ポイントとし、学校など教育施設を選択する際にも、慎重なる考慮を払っている。他方で、彼女らは、外国語でのコミュニケーション以外にも、生活文化の違いがあるので、情報収集や相談相手の獲得などには実に困難が伴っている。つまり、彼女や彼女らの子どもが日本語文化に慣れることは、実に重要かつ喫緊の課題であり、先生から充分な関心を与えられること、日本語と中国語の両方を使う授業の増加、母親への教育方針の判り易く優しい説明など教育施設からのサポート、中国人母親と日本人母親が集って情報交換できるスペースの提供など、社会からの支援が「潤滑剤」となることが望ましいと思われる。

第 3 章では、現在は中国に帰国している高学歴留学生母親の生活状況と彼女たちの子ども養育の現状を述べ、彼女たちが帰国の道を選んだ理由や、異文化経験の活性化と母国の環境に戻った子どもに対する教育戦略の変化を探り、研究者の視点からみた帰国後の母親と子どもの両者の国際化の維持についても検討した。本章の調査対象は 1980 年代前後に生まれた母親であり、高キャリアを求めていることがわかった。子どもの成長、特に子どもの教育点から、母親たちは日本の生活環境や教育環境が中国よりも優れていることを肯定しているが、日本にはこれ以上適切な仕事がないため、帰国することを選択することになった。つまり、中国の方が適切な仕事を得られることが、彼女たちが日本で学位をとった後に日本を離れた一番の理由であった。今回調査した都市の母親は、経済成長により雇用条件の向上などの結果、留学修了後に帰国していた。なお、こうした母親たちは中国に帰国後、日本語の使用や日本への交流に関して、日本とのつながりはそれほど強くはない様に見受けられるが、子どもたちの将来の留学地として、あるいは家族旅行の行き先としては日本を選択肢に入れている者が多い。また、高学歴な母親であるが子どもの未来に対しては、能力や健康な体、良い性格、正しい世界観などへの重視が見られ、高学歴（一流大学や大学院に進学）のこだわりなどはすくない教育戦略を取っていたことがわかった。

第 4 章では、在日高学歴中国人母親に立ち戻り、彼女達が子ども教育における学校選択と言語獲得戦略の経緯を特論した。本章では、日本で子育てをする高学歴中国人母親は、母国の教育と比較しながら、日本の教育を徐々に深く理解していき、主体的に学校選択や言語習得に関する教育戦略を立てたことが明らかになった。ほとんどの中国人母親は、将来のために選択の幅が広がる進学を目指している。母親自身が大学院までの留学経験があることもあって、彼女たちは子どもの大学進学を希望している。また調査結果からは、母親が共通して中国語や中華文化を子どもに受け継がせることを望んでいることが判明する。また、ほとんどの母親は子どもに日本語の勉学をさせながら、中国語補習をも行わせ、バイリンガル/バイカルチュラルの教育戦略を取っていることも、明らかになった。

終章では、第 2 章と第 3 章の結果を比較し、知見のまとめを行った。そして、最後に今後の研究課題を述べた。結論の一つに国際性や日本との繋がりが薄くなりつつある（そう見込まれる）帰国者よりも、積極的に文化融和に努力を注ぐ在日高学歴母親たちが、「安定した高度人材」としての期待ができると考える。高学歴母親の子ども教育戦略作成やその実践に、最も重要なサポートは就職支援やさまざまな情報提供である。これら「育児サ

ポート環境の整備・向上」こそが、彼女たちの日本への定着を進めることになると考える。そのことは、実は、日本社会にとっても、有用なことだと考える。

本稿を構成する既発表論文

陳　暁梅「在日高学歴中国人母親の現状と教育問題―その「教育戦略」と文化融和に注目して」『社会システム研究』第23号、2020年3月発行。